

はじめに

新型コロナウイルスの感染拡大は、一言で表せば、不確実性の塊である。東京・大阪を含めた7都府県に初めて緊急事態宣言が発令された2020年4月7日以降、私たちは常に一週間先すらどうなるかわからない世界に生きている。感染拡大防止と大学における教育をいかに両立するかというのは、今なお現在進行形で議論され続けているが、卒前医学教育、そのなかでも特に、病院という感染症拡大の影響を直に受ける場をフィールドとする臨床実習はより一層の困難さを抱えている。

そのような不確実性の増す時代において、卒前医学教育における学生の教育参画の重要性はさらに増している。医学生は今、従前の教育が十分には遂行できないという前提のもと、何を学ぶことができるか、何を学ぶべきなのかを考えることを余儀なく迫られている。

拙稿では、コロナ禍においてどのような学生の教育参画が実践されているのか、また、その教訓から今後どのようなあり方を目指すことができるのか、筆者の大学時代の取り組みをもとに論じる。

「学生の教育参画」とは何か

そもそも1990年代末に米国で登場した「学生エンゲージメント (student engagement: 学生の学びへの関与)」という概念は、「学生の経験を最適化し、学生の学習成果や成長・発達、大学のパフォーマンスや評判を向上させるために、学生と大学の双方が投資した時間、努力およびその他の関連資源との相互作用」と定義さ

れている¹⁾。この概念は、「成果 (outcome) に過度に依存するのではなく、教育・学習の過程 (process) を重視」し、「学生を受動的対象 (passive subject) と見るのではなく、学習への能動的参加者 (active participant) と見る」思想的潮流にある²⁾。拙稿ではこの流れに則って議論を進める。

ここで問いたいのは、「学習への能動的参加者」たる「学生」とはいったいどのような存在なのか、ということである。むろんそれは漠然と「学生」の総体を指した言葉であり、ある特定のひとりの意欲的な学生だけを捉えているわけでは決していない。では、その「学生」全体、大学によって異なるが仮に一学年100名だとして、その100名が「能動的参加者」として「参画」というのは具体的にどのような事態なのだろうか？

それに対する答えの一つとして、問題になっている事項についてアンケートとして取りまとめ、多数派を「学生の意見」として提出する、という方法がある。しかし以前筆者らが論じたように³⁾、このような形式では、教員の意図や大学の構造的制約を踏まえないまま、自分の利益を最大化する発言のみで終わりやすい。また、学生の不満や要求の一方的な突きつけになることで教員との対立構造を生み、教員・大学からのフィードバックに対する柔軟さを失ってしまう。

そのような問題意識から、筆者が学生時代に所属していた「京都大学医学教育を考える学生の会 (Kyoto University Student Committee for Medical Education: KS-CoM)」では、「学生と教員の懇談会」という自主的な取り組みをコロナ禍以前から始めていた。その基本テーマは、「そもそも論から議論する」であり、学生は「そもそも」教育に何を望んでいるのか、教員は「そ

^{*1} Student Engagement

^{*2} Shogo Toyama 北海道社会事業協会帯広病院

もそも」教育で何をを目指しているのか、「そもそも」大学および社会全体における卒前医学教育のあり方とは何なのか、という点について任意の学生数名と教員数名が集まり議論していた。

ここで参加する学生は特定の個人としての「学生」であるが、一人称的な要望に留まらず、学生全体の学びにとって何が有意義であり得るのか、ひいては大学としてどのような卒前医学教育を目指すべきなのか、を視野に入れているという意味で三人称的である。

コロナ禍における「学生と教員の懇談会」

以上の考えを背景に、KS-CoMは2021年5月22日5・6年次生、5月29日に2～4年次生を対象にオンラインで「学生の教員の懇談会」を開催した⁴⁾。筆者は当時6年次生であったため、5・6年次生の「懇談会」に参加し、司会を担当した。学生・教員の双方から参加者の希望を募り、学生は6年次生・5年次生がそれぞれ2名ずつ、教員は医学教育関係が3名、臨床の診療科から4名が参加した。

会の冒頭は「5年次生の実習がなぜ始まらないのか」「実習中止が長引いたときの影響をどう考えているのか」「夏休みが短くなる可能性はあるのか」という質問が学生側から投げかけられ、まずは大学の状況の共有を求めるところから始まった。また、教員側にとっても学生が今どうしているのかが見えないという同様の問題が指摘され、参加学生から、オンラインで患者の雰囲気を見られないまま医者になる可能性と不安について語られた。そして後半では、「臨床実習の目的とはそもそも何だったのか」から始まり、コロナ禍においてどのような実習が可能なのか・必要なかを議題として掲げた。

「懇談会」は、お互いにブラックボックス化していた学生と教員の現状の共有という点では、家を出ることもままならなかった当時の状況において大きな役割を果たした。しかしながら、主目的である「そもそも論」を目指した後半においては、議論が十分に進まなかったのが実情であった。

筆者は不確実性に満ちたコロナ禍においてこ

そ「そもそも論から考える」ことが重要だと考えていたが、結果としては、不確実性の時代であるがゆえに「そもそも論」の難しさを思い知らされる場となった。「実習はそもそも何のためか」ということを考えるプロセスには非常に時間を要し、本来的には幾度となく議論を重ねてゆっくり深めていくテーマである。しかし、事態が一日単位で目まぐるしく変わり現状の把握すらままならないなかで、そのように腰を据えて議論するというのは非常に困難であった。

それ以前に、現に目の前にある問題に対して「今、これをどうするか」を決めなければならぬ、という差し迫った現実を突きつけられたのだ。有事においては、多数決といった手早く「学生」の意見を集約する方法も活用することの重要性を学んだ。

今後に向けて

——臨床実習の「そもそも論」の試論

「懇談会」がそのような結果に終わったとはいえ、「そもそも論」の重要性がたち消えるわけでは決してない。ここで臨床実習を例にとり、レイヴ&ヴェンガーの議論⁵⁾に基づいて試論を行う。

レイヴ&ヴェンガーは、学習（何を学ぶか）を教育（何を教えるか）から独立したものと捉えたうえで、学習が「職業アイデンティティ形成（professional identity formation）」の一部を成していると指摘した。これはブルデューのハビトゥスに通じる概念で、医学教育の文脈に則して言えば、「医師らしい」認知・判断・行為の全体的マトリクスを身体化していく過程のことである。

病院全体・各診療科の現場を観察すること、あるいはその場に身を置いて雰囲気に触れることは、実習の根本部分であり、医師のアイデンティティ形成に役立つ。教員や既に臨床実習を経験した学生も、個別の経験を振り返ってみれば、そのような印象深い場面が想起できるはずである。しかし、そのような側面については、たとえ何となく認識されているにしても、なかなか言語化されにくいのではないかと筆者は

考える。

つまり「臨床実習」という営為は、単なる医学知識の授受に収まらないのはもちろんのこと、カリキュラムに明文化されている以外の多くのことが教員によって期待され、あるいは、学生によって経験されているのだ。そのような未だ言語化されていない部分は、不確実なコロナ禍において、確実にわかりやすい「必要最低限のこと」に置き換えられ、喪失されるかもしれない。そのような危機感を筆者は抱いている。

結び

拙稿では、学生の教育参画の定義の確認から始まり、「学生と教員の懇談会」の取り組みについて紹介し、それがコロナ禍において果たした役割と、今後の課題について論じた。以上から、平時から臨床実習に限らず、教育が「そもそも何の目的なのか」の議論を蓄積しておく重要性、また、目的に応じて手法を適切に使い分けることの必要性が明らかになった。

拙稿を執筆している2021年9月25日現在、日本におけるワクチン接種は未だ道半ばであり、いまだ誰も俗に言う「アフターコロナ」の世界へは到達できていない。新型コロナウイルスの流行の最中でこのように思考したことが、まさに今の医学部を取り巻く状況を俯瞰し、そして未来を構築する過程に少しでもプラスに働くことを願っている。

■文 献

- 1) Trowler V. Student engagement literature review. *High Educ* 2010; **11**: 1-15.
- 2) 山田剛史. 大学教育の質的転換と学生エンゲージメント. *名古屋高等教育研究* 2018; **18**: 155-76.
- 3) 外山尚吾, 宮脇里奈, 種村文孝. “そもそも論”から議論する学生の教育参画—「学生と教員の懇談会」の試み. *医学教育* 2020; **51** (6): 691-5.
- 4) 外山尚吾. コロナ禍における学生の教育参画—そもそも論から考える. *医学教育* 2020; **51** (3): 358-9.
- 5) ジーン・レイヴ, エティエンヌ・ウェンガー. 状況に埋め込まれた学習. 第1版. 佐伯胖・訳. 産業図書, 東京. 1993.